

複合文化学通信

第 13 号

2009 年 3 月 30 日 **新入生歓迎号**

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 向後恵里子・茂木良治)



複合文化学科へ
ようこそ！



Contents

教 員 自 己 紹 介	2
学 際 コ ー ス 大 賞	16
fukugou-bunka@eiga 桑 野 隆 先 生	18

教員自己紹介

複合文化学科へようこそ！

みなさんがこれから教室で出会い、授業を受ける複合文化学科の専任教員を紹介します。

「経歴や学歴」（多くの教員が多かれ少なかれ「複合的な経歴」をもっています！）にはじまり、「みなさんへのひとこと」のほか、「ぜひ読んでほしい、観てほしい、聴いてほしいという本や映画や音楽」をあげ、最後にそれぞれの教員の「研究室のモットー」を述べます。

教員ひとりひとりが、どのようにして

「教室の外で楽しんでいることを、
教室の中で学問にしてきたか」

に注目してみてください。

1. 略歴（学歴もふくむ）
2. 新入生へひとこと
3. おすすめの本・映画・音楽
 - （1）これは読んでほしいという著作1冊
 - （2）これは観てほしいという映画1作品
 - （3）これは聴いてほしいという音楽1曲
（ないしCD1枚ないし1セット）
4. 研究室のモットー

青山 瑠妙 (あおやま るみ) N 1 クラス担任

1. 略歴（学歴もふくむ）

慶応義塾大学博士課程を卒業して、早稲田大学に嘱任しました。経済学、社会学、政治学、外交について勉強しましたが、専門は現代中国の外交、国際関係です。

2. 新入生へひとこと

この1～2年のどこの新聞で読んだか記憶が定かではありませんが、ある日本人学者がアメリカの某有名大学で教鞭をとって四、五十年。定年退職した際にあ

る記者に「アメリカってどういう国だと思われませんか？」と質問されたときに、彼は「うん～、さあ～」と返答に困ったそうです。ある国を知れば知るほど、その国の多様性についてもわかってくるので、一言でなかなか言い表せないでしょうね。

ここ2、3年ありがたいことに仕事から世界を飛び回ることが多く、さまざまな国籍の学者と親しく付き合う機会がありました。旅行ではなく、1年間以上生活し

た国も3カ国に上りました。こうした海外での経験から、その日本人学者の気持ちは非常に理解できます。

『中国人、会って話せばただの人』というタイトルの本がありますが、とてもいい表現です。「アメリカは……」、「中国人は……」、「日本人は……」とか物事を一括りでみるのではなく、すべての国やすべての人をただ「ただの人」としてみろって、単純なことのようにみえて意外と難しいことかもしれません。

浜 邦彦

(はま くにひこ)

N 2 クラス担任

1. 略歴 (学歴もふくむ)

大阪生まれの東京郊外育ち。大阪弁は失われた母語だと思っている。

法学部志望だった浪人中に、ビクトル・エリセ監督の『ミツバチのささやき』を観てしまったために、東京外国語大学スペイン語学科に入学。入学早々に天安門事件が起こり、その年の暮れにはベルリンの壁が崩れた。テレビのない木造アパートで、湾岸戦争が起こり、ソ連が解体し、ユーゴ紛争が泥沼化する学部生時代を過ごした。まだインターネットのない時代、「世界」はむしろ生々しいまでの現実感をもって、ひとりの外国語学部生の思考と生活をゆさぶっていたように思う。

スペイン語学科でカルペンティエールやガルシア＝マルケスを翻訳で読んでいううちに、「ラテンアメリカ」では括れない異質で多様な世界の感触を覚えて、それがどういう世界なのかと探っているうちに、カリブ海の研究を志すようになった。

東大駒場の大学院に進み、その後は非常勤講師の貧乏暮らし。いくつかの大学でスペイン語やカルチュラル・スタディーズを教えた後、昨年の春から早稲田大学に着任。1年目は期待よりも戸惑いのほうが大きかったが、2年目の今年は、期待のほうが上回っているかも。

2. 新入生へひとこと

ご入学おめでとうございます。

みなさんはすでに生徒ではなく、学生です。

習うよりも、学びましょう。求めるよりも、探しましょう。

大学も図書館も、そのためにみなさんを待っています。

3. おすすめ

(1) 本

① イマヌエル・カント、『啓蒙とは何か』

これから大学で学び、考えようとするみなさんに、最初に読んで欲しいテキストのひとつです。

カントの大学論としては『学部争い』が有名ですが、そのエッセンスはむしろ、この短く明瞭な——しかもおそろしく問題含みな——テキストに現れていると思います。原理的な思考というものがもつラディカルな破壊力は、200年以上たった今日の大学生と大学教員をも、一撃しないではおかないでしょう。

「自己責任」などといった安直なスローガンがはびこる今こそ、「あえて」読まれるべき古典である、とも言い添えておきましょう。

② マックス・ヴェーバー、『職業としての学問』

カントより1世紀以上のちに、20世紀ヨーロッパの知的・政治的危機のただ中で発表されたこの講演は、おそらく今日の大学の姿を、はるかにリアルに抉り出すものとして読めるでしょう。やはり短いテキストながら、研究職にかぎらず、大学で学び、専門職につきたいと考える若い人びとに与える衝撃は、今も色あせていないと思います。実際、ここでヴェーバーが展開した、専門性の限界をめぐる両義的な考察は、「学問はかくあるべし」といった単純な回答を期待する読者を、むしろ倫理的・政治的な難問に直面させるものとなっています。

③ ジャック・デリダ、『条件なき大学』

そしてさらに1世紀後のいま、大学とはどういう場所で、そこでみなさんは何を学ぼうとしているのでしょうか？

それを考え、見出し、創り出すのは、大学生になったみなさんひとりひとりの頭と手に託された仕事です。

(2) 映画

ペドロ・コスタ監督、『ヴァンダの部屋』

(2000年、葡＝独＝仏)

リスボン近郊のスラム。破壊されてゆく街の、蝕まれてゆく生活。なすすべもなく薬物に溺れつづける、貧しいヴァンダの狭苦しい部屋。動かないカメラを通じて、それをただ見つめつづけるだけの3時間。この上なく退屈な、この上なく息苦しい3時間……のはずなのに、それがまるで違う。なぜこんなに美しいんだろう？なぜこんなに愛おしいんだろう？息をするのももったいないような、この親密な崇高さはいったい何なんだろう？

映画とはときに、奇跡を宿すことができるものらしい。

(3) 音楽

ボブ・マーリー、『レジェンド』

これまででもっとも繰り返し聞いた1枚となれば、やはりこれしかない。カリブ海が生んだ最高のアーティスト。語りたことは多すぎて、ここには書ききれない。(紹介になってない？じゃ、聴いてごらん)

4. 研究室のモットー

危機を思考せよ

humanity (「人間性」「人類」、複数形で「人文学」) についての思考は、つねに crisis (危機) の認識とともにありました。深刻な危機の認識が、真に critical (批判的) な思考と、文化についての critique (批評) を生みだしてきました。

今日、私たちは大きな危機の時代を生きています。ですがそれは、グローバルな経済危機や、「テロ」の脅威といったようなものののでしょうか？いたずらに不安を煽りたてる危機言説に踊らされるのではなく、危機を通じて表われる humanity のあり方と可能性を思考することが求められているのだと思います。

神尾 達之 (かみお たつゆき)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

みうらじゅんが『日本のチベット』と呼ぶ『雑多』な町、高円寺で生まれました。借金を返すためだったと確信しますが、ある日突然父親が勝手に家を売却してしまったので、その後は賃貸生活を余儀なくされ、それが悲しい習性になり、現在まで●●回転居＝漂流。人生が旅かも(∧_∧)。高校は石神井の早稲田高等学院。いちおう理工学部に入校したのですが、女子学生がいなくて最強の理由として(∧_∧)、第一文学部に転部＝漂流。ドイツに2年間留学、某地方国立大学に12年間勤務したのち、1994年に早稲田に漂着。

2. 新入生へひとこと

東京生まれの方も地方から来た方も、この4年間を使って東京を歩き回ってみてください。できればデジカメを持って。早稲田を中心に四方八方探索し、マイ・スポットを発見するのも楽しいですね。町には複合文化学のネタがいっぱいころがっています。そういえば「書を捨てよ、町へ出よう」というキャッチ・フレーズを作ったのも、みなさんの先輩であるT.S.でした(←問1: 誰?)。入門編としては、塩地蔵尊があるところにゃく閻魔(異界への迷入)→文京シビックセンターの展望室(鳥瞰という視座)→ラクーアのサンダードルフィン(混濁する感覚)がお勧め。付近には、某思想家が住む猫顔のビルもあります(←問2: 誰?)。ポストモダンとは過去の様式を折衷＝パッチワークしますが、伝統とモダンが『雑多』に混在している(調和ではなく)東京を楽しみながら、みなさんの歩行によって、東京の『雑多』さに自分のラインを書きこんでみてください。そうすれば歩く複合文化学者になれる?

3. おすすめ

(1) 本 金塚貞文『オナニズムの秩序』

(哲学っぽくて難しいIV章やVI章は流してもかまいません)

推薦理由×3→①複合文化学が扱うテーマの多くは日常生活に隠れています。自分の周辺部に目をやると、文化が立ち上がるプロセスが見えてくることがあります。たとえば、みなさんは人間であると同時にヒトでもあるので、オナニーは身体にほとんどプリインストールされています。オナニーは近親相姦や同性愛と同じようにタブー化されていますが、これらの性衝動がタブー化されることで人間の文化が成立していきます。ざっくり言えば、『雑多』さから『秩序』への編成です。

②みなさんは、大学でおそらくフーコーという名前や「言説」という概念を耳にし、知ったかぶりをすることになるでしょう。しきりに語られること、あるいは語っても問題ないことがある一方で、排除され語られないことが沈黙し、しかも語り方のフォーマットにも実はお約束があったりして、というのが「言説」の構造です。この本はその仕掛けをうまく説明してくれます。

③複合文化学は立ち上がったばかりの「学」問ですが、ヒトの性衝動に関する話は今からだいたい100年前頃に学問になりました。性科学という学問です。性科学の歴史をながめれば、一般に、学問とされている営みが、最初から学問だったのではなく、元来は生き生きとした好奇心から発したことが分かるはずで。さて、タイトルに引かれて興味本位でこの本を読む人、あなたは複合文化学を学ぶ最初のハードルをクリアしました。興味本位を大切にしてください。興味がないのに、「教授に言われたから」とか「必読文献に入っているから」などという教養主義から本を読むことくらい、つらいことはないです。少なくとも私にとつては。

(2) 映画

タルコフスキー『サクリファイス』

今はやりの『セカイ系』に分類されるかもしれませんが。1986年に発表されました。チェルノブイリ原子力発電所とスペースシャトル・チャレンジャー号が爆発し、日本ではバブル景気が開始した年とされています。みなさんがこの世に生を受ける数年前のおぞましくも楽しい時代にふさわしい、チョークールでチョーホットな映画です。パッハのマタイ受難曲の"Erbarne Dich"が頭から離れなくなるはず。武満徹は新しい曲を書くと、かならずこのアリアを聴いた言われています。DVDは絶版。大学の図書館で観ることができます。

(3) 音楽

スクエアプッシュャー『GO PLASTIC』

私にとって音楽はお勉強の対象ではなく、お勉強をする際に脳を活性化してくれるドリンク剤にすぎず、個人的な嗜好が反映しているのでお勧めしません。ヘッドフォンを装着した脳内では、岡村靖幸、マッシュヴ・アタック、クセナキス、70年代のマイルスが混在しているので、いちおうCross the border - close the gapかも。

4. 研究室のモットー

私の研究室は、「事務処理」ど「授業準備」のための悲しい「仕事室」です。この二つで両手がふさがっていますが、いちおづ研究室」という名称を剥奪されないために、ごくまれに、恥ずかしながらシコシコど「研究活動」にふけることがあります。事務処理→授業準備→研究活動→みなさんのおしゃべり、という順番で自分の時間を使っているの、研究室を訪問される場合は、メールによってアポイントメントをとっていただくと、激うれし、です。最後に:「一体全体学者といふ者は、弱虫で引込み思案の癖にうぬぼれの強い動物だ」という山本宣治(←問3: この人、誰?)の言葉をドスのように懐に入れて研究室をノックすると、大事に至らないですむかもしれませんよ。

楠元 範明 (くすもと のりあき)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

・神奈川県に生まれる。神奈川県立湘南高等学校卒。

高校時代は体育祭実行委員会、文化祭実行委員会、部活動(生物研究部/放送部)と課外活動ばかりに専念。小学校から高校までをかけて、当時発売されていた日本語訳本の SF をほぼ読みおえた。

・早稲田大学 教育学部理学科生物学専修、同大学院理工学研究科物理学及応用物理学専攻生物物理学部門修了 博士(理学)取得

光合成のしくみを明らかにすることにより世界のエネルギー危機を救う、とまじめに研究。測定機器作成や制御プログラムを通してコンピュータを扱うようになる。

・早稲田大学 教育学部助手(生物学専修)

今でいうリメディアル教育に、当時普及しつつあった WorldWideWeb を使えないかと教育の情報化に関する研究をはじめめる。その結果、教育学部助手(情報化推進委員会)として異動。同時期に早稲田大学 MNC 兼任助手に。

・早稲田大学 専任講師(視聴覚教育メディア論等担当)として採用

以後現在に至るまで教育の情報化、科学(啓蒙)教育に関して教育・研究をおこなってきた。

2. 新入生へひとこと

学際といっても中心となる学問分野を押さえる必要があります。たとえば私のゼミを選択するなら、それは広義の情報学となります。本学科は多様な専門を持つ教員がいますので、それをじっくりと選ぶとともに、必要な基礎をきちんと学んでください。大学はモラトリアム機関(期間?)ではありません。

3. おすすめ

(1) 本

おすすめの専門書はありますが、まだ早

いので入学前に軽く読み飛ばせる SF から。

A・E・ヴァン・ヴォクト:

宇宙船ビーグル号の冒険 (1950)

(電子ブックでも売られます)

この本の主人公はネクシャリズム(情報統合学とか総合科学とか訳されているようです)を修めた人で、それぞれの学問分野の専門家が発見した事実を組み合わせ、専門家よりもより効率的に応用するというストーリーです。これまでネクシャリズムという概念は夢物語と考えられていましたが、コンピュータやネットワークの発展によりその一部は実現可能となってきました。みなさんもそんな人間を目指してみませんか?(ただし本の記述内容は SF なのであくまでもフィクションですよ。)

(2) 映画

いわゆる“お涙ちょうだい”、“愛と感動を”、といった映画はあまり好きではありません。暗に思想を押しつける(美化する)ようなものも嫌いです。大学~大学院修士時代に(古い映画を 3 本 1000 円程度でみれる)名画座を中心に 100 本程度しかみていないので、他の先生方のように蘊蓄[うんちく]もありませんし、残念ながら是非みてくれという映画もありません。

ただ、映画作成にかかわる技術(SpFX や VFX)、映画館の音響や映像機器は大好きです。

最近ヒットした『ALWAYS 三丁目の夕日』ではストーリーではなく、VFX を効果的に使った昭和 30 年代(*)の風景に涙しました。(* ちなみに私がそだったのは、昭和 40 年代ですが、あまりかわりありませんでした。)



(3) 音楽

松武秀樹/Logic System 東方快車

私が中高時代を過ごした 80 年代は、テクノポップ全盛期でした。ドイツのクラフトワークや、(最近 CM で復活?した)YMO の、いかにも電子音に驚き、そして感動したものでした。音楽にはそれほど貪欲ではなかったため、未だに当時と同じ曲を環境音楽として聴き続けています。その中でもお気に入りには YMO の 4 人目のメンバーといわれた松武秀樹が主催していた Logic System のアルバム「東方快車」。A. W. Ketelbey 作曲の著名な「ペルシヤの市場にて」の一部を、シンセサイザーを使って表現したものが含まれていますが、この幻想的な雰囲気を出すという点では、管弦楽による表現を超えているのではないかと思います。

4. 研究室のモットー

文理融合型の理系部分にあたります。私の出身が実験系であることもあり、理系的な研究スタイルすなわち、「ゼミ生は授業以外の時間は実験実習室で学ぶ」という形をとることになると思います。意欲のある学生はぜひトライしてみてください。しかし、ただがむしやりにやればよいわけではありません。たまには休むことも重要です。そんなとき、私は 1 人で静かな日帰り温泉に行くことにしています。写真はこの夏煮詰まったときに行った温泉での作業環境です。8 時間の滞在でとても作業が進みました。

桑野 隆 (くわの たかし)



1. 略歴 (学歴もふくむ)

1947年徳島県鳴門市生まれ。家のすぐ前が海で、その200メートルぐらい先は小さな島です。たまたま東京外国語大学ロシア語科に入学し、たまたま同大学院に進んでしまいました。そのため、「なぜロシア語を選んだのですか」とたずねられるといつも困っていますが、結果的にはロシア語を選んでよかったと思っています。東京だけでなく長野、岡山などでも非常勤講師を勤めた後、1979年に東京工業大学に赴任、88年に東京大学に移り、2001年からは早稲田大学に勤めています。現在の専攻は表象文化論とロシア文化です。

2. 新入生へひとこと

昨今では大学もさまざまなかたちで社会に開かれてきています。「象牙の塔」という言葉はもはや死語と化していると言っても過言ではありません。もちろん、そのこと自体は歓迎すべきことです。ただし、「開かれた大学」の雰囲気呑まれるあまり、大学生であるという特権を活かせないまま終わるおそれもないではありません。大学ならではの自律した精神空間はしかと持っておいたほうがいいでしょう。

3. おすすめ

(1) 本

ドストエフスキー

『カラマーゾフの兄弟』

新潮文庫や岩波文庫でも読めますが、皆さんの世代には亀山郁夫氏による新訳(光文社文庫)がいちばん近づきやすいかもしれません。主要な登場人物のそれぞれが「複数の声」をかかえていて未完の対話をつづけていくこの小説は、何度読み返しても最終的な答えが得られません。

(2) 映画

マルセル・カルネ監督

『天井桟敷の人びと』

お勤めの映画は数多くありますが、ひとつとなるとやはりこれでしょうか。19世紀半ばのパリにまだ保たれていた見世物小屋をはじめとする祝祭空間や、「舞台

の上の舞台」を観ているような「芝居臭さ」、「非日常性」が、みごとに映像化されています。女芸人ガランスも無頼漢ラスネールも愛すべき人物ですが、なんといっても、ジャン＝ルイ・バローが演じるパントマイム芸人バチストが最高です。

(3) 音楽

ゲルギエフ指揮、シヨスタコーヴィチ

『交響曲 第4番 ハ短調 作品43』

シヨスタコーヴィチはこの作品を1936年4月に完成させたものの、12月に予定していた初演を撤回しました。撤回の理由には諸説がありますが、いずれにせよスターリン体制との確執があったことには変わりありません。1961年になってようやく初演の機会を得ました。ゲルギエフの指揮は、こうした全体主義的な状況下での芸術家の闘いを誰よりも説得力豊かに復元しています。

4. 研究室のモットー

「研究室」は16号館の815ですが、私の場合はここで研究に没頭することはほとんどありません。ときには読書会をしていたり、あるいは院生・学部生の論文指導をしているかもしれませんが、基本的には学生のみなさんとの交流の場だと考えています。ですから、ちょっとのぞいてみてください。



後藤 雄介 (ごとう ゆうすけ)



1. 略歴 (学歴もふくむ)

東京オリンピックの最中に、埼玉県川口市で生まれる。以後も埼玉県内で100%純粋培養されるも、これといって特徴のない埼玉県に対する郷土愛は限りなくゼロに近い(!?)。埼玉県に負けず劣らず、自分自身も高校まで凡庸な生活を送ってきたが、なにを血迷ったのかスペイン語を学ぶことを決意し、東京外国語大学スペイン語学科に入学。これがその後の人生を大きく左右することに。同大学大学院地域研究研究科修士課程修了。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。南米ペルー留学(1990-91年)。青山学院大学文学部勤務を経て、2000年より早稲田大学教育学部に着任、現在に至る。ラテンアメリカ思想文化史専攻。人種・民族・エスニシティ差別問題全般に関心あり。

2. 新入生へひとこと

入学おめでとうございます。聞き慣れない名前の学科に飛び込んできた皆さんは、スペイン語の「ス」の字も知らずばどれ、いっちょスペイン語でもやってみるかな」と思いついてしまった私に、どこか似てなくもありません(笑)。どうかこれからも、その「無謀さ」をいい意味で大切に、さまざまなことに果敢にチャレンジしてください。

3. おすすめ

(1) 本

複合文化学科のカリキュラムは、「英語以外の外国語の習得」・「文化現象の複合的理解・分析」・「情報通信ネットワークの活用」の3つの柱からなっていますが、これ

までの入学生を見ていると、肝心の(!)外国語学習に対するモチベーションが必ずしも高くないのではないかと思えるときがあります。そこで今回は、新入生の皆さんにぜひ外国語学習の重要性和「楽しさ」を知ってもらうために、語学関連書からの選書としました。

① 黒田龍之助『外国語の水曜日——学習法としての言語学入門——』 (現代書館、2000年)

・外国語ならなんでもござれの著者の研究室には、理系の大学にお勤め(出版当時)であるにもかかわらず、毎水曜日、語学に関心のある学生が三々五々集まってくるという。タイトルが「外国語の水曜日」たる所以である。正直なところ「なんで外国語なんか勉強しなければならないのかなあ?」と思っている人にこそ、本書は手に取ってもらいたい。手始めに、第一章の「ムーミンを世界一苦しみながら読む青年」から読んでみよう。まさに抱腹絶倒である。外国語学習は考え次第で「楽しく」なるのである。同じ著者による『その他の外国語——役に立たない語学のはなし——』(現代書館、2005年)・『ポケットいっぱい外国語』(講談社、2007年)・『語学はやり直せる!』(角川 ONE テーマ 21 [新書]、2008年)もお薦め。

② 菅啓次郎『コヨーテ読書——翻訳・放浪・批評——』(青土社、2003年)
・「語学をやる以上はやっぱり話せなくちゃね」・「辞書を引き引き本を読むなんて面倒くさいよ」と思っている人は、ぜひ著者の言葉に耳を傾けてほしい。本書は語学書ではなく、読書・翻訳や旅することの＜快乐＞を魅力的に描いた好著だが、文学行為を『現実』の直接性(ただちに反応しなくてはならないという必要)を欠くだけ多くの時間を費やして、ある行為や言葉の意味と射程をよく考えてみるができるものと位置づけるその姿勢は、語学についても「時

間を費や」すことに積極的な意味があることを示唆してくれる。語学は「会話」(反射神経)も大切だけど、「熟読」(内省する力)もまたとても重要なのである。

③ 拙著『語学の西北——スペイン語の窓から眺めた南米・日本文化模様——』 (現代書館、2009年)

・①・②ほかその他多くの書に学び、私もまた語学について自分なりの考えをまとめてみました。私の「外国語という自明ならざるものに取り組んだという経験」が、外国語という枠をも越えてどのように生かされてきたかを感得してもらえれば幸いです。さてしかし、語学の「西北」とはいったい何? それは実際に読んでもらえればわかります。ぜひ購入してください(研究室では著者割引価格で買えます)。巡りめぐって印税で奢ってあげられるかも?(笑)



4. 研究室のモットー

「およそ人間に関わることで、私に無縁なことはひとつもない」

・古代ローマの詩人テレンティウスの喜劇のなかのセリフ。あらゆることに関心を抱き、常に探求心旺盛であってほしいと思います。学科名が複合「文化」だからといって、「サブカルにしか興味がな〜い」なんてケチくさいことは言わないこと(笑)。ひとくちに文化といってもその領域はじつに広いし、また、文化が中立的に存在することなどありえず、そこにはさまざまな政治性・社会問題が絡んでいるはず。ただ「好き」なテーマを選ぶのもいいけれど、そのときは自分の「狭い殻」に閉じこもらないように注意したい。むしろ「違和感」を感じた問題を掘り下げる方向に進むことを、私としてはお薦めしたい。合い言葉は、「文化」を「政治・社会」化せよ!

高橋 順一 (たかはし じゅんいち)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

1950 年宮城県仙台市生まれ。立教大学文学部ドイツ文学科卒業。埼玉大学大学院文化科学研究科言語文化論専攻修士課程修了。専攻は近代ドイツ・ヨーロッパを中心とする思想史および現代社会・文化理論研究。1987 年早稲田大学教育学部専任講師。89 年同助教授。94 年同教授。ドイツ語の講義を担当するかたわら、学際コース発足時より「異文化交流接触論」「現代社会・文化総論」「現代思想」「現代芸術論」などを担当。また文学部および文学研究科で「社会科学論」「ドイツ思想講義」「社会学特論」などを、アジア太平洋研究科で「社会科学の基礎」を担当。最近は近代日本思想史研究にも手を染めている。

2. 新入生へひとこと

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。複合文化学科はみなさんを第二期生として迎え入れることになります。ともに新人どうし、新しい学科の創設とその中身の構築をともに担ってゆくわけです。大学という言葉は「大いに学ぶ」という動詞形の言葉であり、本来できあがった制度を表す言葉ではありません。とくにこの複合文化学科には既存の実績も体制・組織も存在しませんから、すべてがゼロからの出発になります。だからこそみなさんの、そしてもちろん私たち教員もそうですが、「大いに学ぶ」動詞的な態度にこそこの学科の未来はかかっています。



(写真はマルクスの生地、ドイツ、トリアーのボルタ・ニゲラ)

3. おすすめ

(1) 本

マクス・ホルクハイマー／テオドーア・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』(徳永尚訳 岩波文庫)。

著者たちは、20 世紀に登場した「新しい野蛮」であるナチズムの起源を遠く古代ギリシアにまでさかのぼって、ヨーロッパの文明史全体の問題、とくにそれを突き動かしていた原理としての「啓蒙(人間の理性作用)」の持つアイロニカルな暴力性から捉えようとしました。この本を読んでいると、現代社会における抑圧やいじめ・差別、CMによる消費者の意識操作、ネット・チャット現象などがすべてナチズムに象徴される 20 世紀の全体主義現象と無縁でないことが分かります。難解な本ですが、私たちの時代の根源である 20 世紀を知るための必読書です。

(2) 楽劇 リヒャルト・ヴァーグナー・

楽劇『ニーベルングの指環』(全四部作)。

オペラ史上最長(全部で約 15 時間)のこの作品は、貨幣＝資本を主人公とする近代産業社会の複雑な弁証法と、そこに組み込まれている多様な要素(貨幣＝資本はもとより、欲望、権力、性、芸術、革命などの要素まで)を音楽劇の象徴性の次元を通して形象化しています。ヴァーグナーの同時代であり、共通の友人の存在など浅からぬ因縁のあるマルクスの『資本論』とこの『指環』を重ねあわすとき、はじめて 19 世紀から現代へいたる近代史の歴史の原像が明らかになるとさえいえるように思えます。

(3) 映画 サタジット・レイ監督作品:

『大地のうた』『大河のうた』

『大樹のうた』三部作

1950 年代のインドで製作されたこの映画は、ある面からいえばジャン・ルノワール(仏)や溝口健二(日)らの影響下においてインドを映像化した「オリエンタリズム」映画という性格を持っています。じっさいレイはインド国内ではあまり評価されない監督でした。しかしベンガル地方の貧しいバラモン一家に生まれた主人公オプーの成長を追うこの教養小説的映画が、近代と遭遇し翻弄されるアジアの一隅でどのような深いドラマが演じられつつあったかを清冽に描ききっていることもまた事実なのです。なによりその映像世界の透明度と結晶度の高さに驚かされます。

4. 研究室のモットー

私の研究室の本棚には、マルクスのとなりに印象派研究の本があり、そのとなりに日本古代史の本が並んでいます。この雑駁さからも分かるように、私の研究室はどんな分野も問題関心も拒まないことをモットーにしています。そして自分がそうであったように研究は基本的に「独学」すべきものだと思っています。自分で問題を発見し、自分で資料を探し、方法を考え、まとめてゆく、その過程が大切なのです。私たち教員はあくまでそれを傍らからサポートするだけです。そして研究に関して教員と学生が本質的に対等だということも申し添えておきましょう。

高橋 良行 (たかはし よしゆき)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程中国文学専攻修了。愛知淑徳大学文学部教授を経て、現在、早稲田大学教育・総合科学学術院教授。この間に北京大学中文系で在外研究。

専門は中国文学 (主として盛唐・中唐詩)、日中比較詩学ですが、趣味として、短歌・俳句・漢詩も少し作っています。

2. 新入生へひとこと

『論語』に、「学びて思はざれば則ちらく、思ひて学ばざれば則ち殆 (あやふ) し」という孔子の言葉があります。どのような時代になっても、何を学び生み出すにしても、読書と思索とは、車の両輪のごとく不可欠な行為であろうと思います。たとえ複合文化学科であっても。



(写真は中国の三峡)

3. おすすめ

(1) 本

松浦友久『漢詩一美の在りか』(岩波新書)
漢詩について、目から鱗が落ちます (たぶん)。

(2) 映画

「ベン・ハー」
(チャールトン・ヘストン主演、1959年)
212分の大作。手に汗握る感動の連続ですが、最後までキリストの顔が見えないところもまた感動的です。

(3) 音楽

谷村新司の「昴」
疲れたときに聴くと、少し元気が出ます。

4. 研究室のモットー

対他的には、俗諺にいう「来たる者は拒まず、去る者は追はず」、対自的には、「水流るも心は競はず、雲在 (あ) りて意は俱 (とも) に遅し」(杜甫「江亭」) でありたいと思っています。

丸川 誠司 (まるかわ せいじ)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

東京外国語大学フランス語科卒業、パリ第八大学文学博士。

欧州でも大きな多民族国家フランスに10年滞在。



2. 新入生へひとこと

ますます生き辛い世の中です。利益や金など数値に計算されてしまわない自分自身の価値観の形成に向けて今からの四年間でいろいろ考えて、充実した大学生生活を送ってください。

3. おすすめ

(1)

推薦する本。小説を何冊か挙げます。
トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』
スタンダール『赤と黒』
カフカ『城』
セリヌ『夜の果てへの旅』
それ以外に、今の日本について考える意味で
加藤周一『私にとっての二十世紀』

(2)

推薦する映画。
「緑の髪の少年」(J. ロージー監督)
「赤い河」(H. ホークス)
「上海から来た女」(O. ウェルズ)
「現金に手を出すな」(J. ベッケル)
「東京物語」(小津)

(3)

推薦するCD。
とりあえずピアノ・ソロをいくつか。
バッハ「平均律クラヴィーア第一巻」(リヒテル)
ベートーヴェン「三大ソナタ」(ギレリス)
シューマン「交響的練習曲」(ボリーニ)

4. 研究室のモットー

なし。

原 克己 (はら かつみ)



1. 略歴 (学歴もふくむ)

【育った場所】長野県の山の中。アルプス山麓の森の町。

【少年時代の夢】航空力学を学び、宇宙ロケットの設計技師になるのが夢だった。

【学生時代】早稲田大学理工学部合格するも入学辞退。阿佐ヶ谷で下宿しながら、二年間、ヒッピー生活を送る。ハードロックと読書三昧の日々。インドへ渡り修行僧になる計画も、ヘタレなボクは結局断念。笑っちゃう二年間。ある正月、他にやる事がなかったのも、フッと大学受験を思い立つ。受験勉強は二年前の記憶だけが頼り。結局、立教大学文学部ドイツ文学科に拾ってもらった。なぜ立教で、どうして文学部で、しかもドイツ文学だったのか。そんなのはすべて偶然の結果。ボクにもよく分からない。

大学ではテキスト理論と文化記号論を徹底的にたたき込まれた。今でも、テキスト理論とか聞くと、少しだけウンザリする。でもなんだかんだで、大学院博士課程の在学中に就職が決まった。赴任地は神戸大学。迷ってばかりだったけど、結構面白かった東京での学生生活 10 年間だった。

【教師生活】神戸大学国際文化学部で 11 年、立教大学文学部で 10 年、早稲田大学に来て 4 年。大体 10 年単位で彷徨ってる。まるでローリングストーン。放浪癖は治っていないらしい。ボクの研究も同じで、一つの場所に凝り固まっていない。ドイツ文学研究・テキスト理論から文化記号

論へ、都市論・メディア論から表象文化論へ。カフカからベンヤミンへ、バルトとフーコーからキットラーへ。文学からポピュラーサイエンスへ。内的必然性があるからと言いつつ、戦線は拡大する一方だ。思えば 30 年前、理系から文系へと転身したのだったし。ボクの中の DNA は変わりようもないか。

2. 新入生へひとこと

「良い感性している奴」とか、「良いセンスしている」とか言う。服の趣味じゃない、世界観のことだ。ボクもセンスの良い奴は好きだ。というか、センスの悪い世界観は好きじゃない。良い感性がないと、素敵な世界観はなかなか持てないものだ。感性は大事である。でも、感性だけで終わるのはダメだ。一般に、感性と理論は反対物のように思われているが、これは間違いだ。感性と理論は補完関係にある。いわばメダルの裏表の関係なのだ。感性無き理論は蒼白く、理論無き感性は傲慢である。自分の感性は大事にするのがよろしい。それなしには、何も始まらないからだ。しかし、感性を感性のまままで終わらせてはいけない。君にしかない感性を、理論でもって強靱なものに仕上げるのだ。自分の感性を理論で鍛え上げたかったら、ボクと一緒に学ぼう。入学おめでとう。

3. おすすめ

(1) 本

『変身』フランツ・カフカ

ドイツ文学科だったから言うわけじゃないが、二〇世紀文学の先駆者というだけあってカフカの語り口は「恐い」。ホラー映画なんか目じゃない。絶望のなかに見えた希望も、じつは欺瞞だったというカフカの仕掛けに、心底の恐怖を味わってくれ。「読後の爽快感」なんてたわごとは、すべてぶっ飛ばしてくれる。

(2) 映画

『イーザーライダー』

デニス・ホッパー監督

ヒッピーだったから言うわけじゃない

が、一切のイデオロギーを拒絶するとはこういうことだ。ハーレーにうちまたがり、都会を捨てて虚構のユートピアを目指す二人の青年の悲劇は、「出口なし」という状態の鏡像にほかならない。逃避行の不可能性とむきあう。これは今でもボクの原点だ。問題は、そこでもなお何が出来たかだろう。

(3) 音楽

『ストーン・フリー』

ジミー・ヘンドリックス

ロック・フリークだから言うわけじゃないが、ジミヘンに比べれば、クラブトンもジェフ・ベックも色あせて聞こえる。手近なところでは、MCA の『エクスピリアンス・ヘンドリックス』の六曲目に収録されている。「ストーン・フリー」とはドラッグでぶっ飛ぶこと。ただしジミヘンは、楽曲でぶっ飛んでる。薬でしかぶっ飛べないのは、感性が鈍い証拠だ。

4. 研究室のモットー

とりたてて研究室のモットーなんてないけど、ひとつだけ。「来たれ、真のオタク。」ボクのゼミはオタクの集団だ。いじめ問題のオタク、教科書のオタク、ブラックミュージックのオタク、漫画のオタク、自動車のオタク、ファッションのオタク、映画のオタク、文学のオタク。自分なりの「強いこだわり」を持った学生こそ大歓迎だ。何にこだわっているかは、一切問わない。下らないものにこだわっていても、一向構わない。ちなみにボクはスケールプラモデルのオタクだ。問題は何にこだわっているかではなく、どれだけこだわっているかだ。原ゼミでは、その「こだわりの深さ」を出発点にして、一見なんの変哲もないように見える日常的なモノのなかに潜んでいる、奥深い表象構造をあぶりだす。誰もが知っているモノのなかから、誰も気づかなかった表象構造を析出する。これが原ゼミの狙いだ。これこそ新しい世界認識を手にする第一歩だからだ。そんな四年間にしたい諸君、来たれ原ゼミに。待ってる。

福田 育弘 (ふくだ いくひろ)



(写真は、フランス、ブルゴーニュ地方、
モンラシェのぶどう畑)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

1955 年名古屋生まれ。名古屋生まれてですが、母親が大阪、父親が紀州なので、アイデンティティは西の方にあります。二日酔いのときは、そばよりうどんが食べたくなります。ただ、配偶者からは「インチキ関西人」と呼ばれていますが。忘れかけていますが、相手がいれば名古屋弁はとりあえずネイティブです。

愛知県立旭丘高等学校卒。2 年生あたりから、まともに勉強しなかったため(とくに英語と古典)、内申 3.0 を切り(!) 2 浪して早稲田大学第一文学部になんとか入学。同大学フランス文学専攻卒業。早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士後期課程中退。1985 年から 88 年まで、フランス政府給費留学生としてパリ第 3 大学博士課程に留学。1991 年から年流通経済大学の教員となり、1995 年早稲田大学教育学部に嘱任。その間、2000-2001 年に南仏のエクス・アン・プロヴァンス大学で在外研究。

高校時代、とにかく英語が嫌いで、もともと外国語にさほど興味がなかった(たとえば、フランスに生まれればだれでもフランス語がしゃべれて読めるじゃないか、と不遜にも思っていたので)、まさか外国語を教える身になろうとは、中学高校時代の自分に出会っても信じてはもらえないでしょう。とりあえず、やっていることは、ポストコロニアルの複合文化、とくに〈飲食表象論〉です。

2. 新入生へひとこと

新しい学科に入ってこられたみなさんの勇気に敬意をはらいます。みなさんの新鮮な心意気にこたえる授業をするところがかげますが、みなさんもぜひ自身の関心をせばめたり、好奇心を失ったりせず、つねに多様なもの、異質なもののへの興味をもちつづけ、さらにそれらを広げていってください。

しばしば、「学問」や「研究」は自身の興味や関心をせばめることだという誤解がありますが、複合文化学科では、多様な関心を多面的に展開することが、学問や研究の基盤となることを忘れないでください。

3. おすすめ

(1) 本

吉田健一『金沢』講談社文芸文庫

作者は、そう、あの敗戦期に日本を牽引したワンマン宰相故吉田茂の息子で、イギリス文学やフランス文学に関する翻訳や評論が多数ある英文学者で評論家です。この作品は、そんな吉田健一が 50 代になって書きはじめた小説のひとつ。古都金沢を舞台に、おもに飲食をとおして、時空間を自由にかけてぐるユートピア小説です。ユートピアとはもともと「ここにはない場所」(「非在郷」)という意味ですが、この小説を読むと、ユートピアとは日常のどこにでもありえる場所なのだと気づかされます。どこからなにがどうなっているのかよくわからない息の長い吉田健一の文体が、いよいよ冴えわたり、破格な展開を示して、一種「突きぬけた」感じです。

(2) 映画

アン・リー監督

『ブローックバック・マウンテン』

(アメリカ 2005)

アン・リーは現存する監督でもっとも人間描写がうまい一人で、いつもうなづけてくれます。もちろん、泣きも、笑いもあるのですが。多分、台湾出身で、アメリカで暮らしているという部外者の視点がいいのでしょうね。この映画も、マッ

チョのプロテスタンティズムの国では認められない〈クローゼットゲイ〉を描いていて泣かせます。アメリカ的飲食シーンもけっこう重要です。「複合文化学テーマ演習 1」では、同じアン・リー監督の飲食人情喜劇『恋人たちの食卓』(原題『飲食男女』)を取りあげます。

(3) 音楽

マーラー 交響曲 第 5 番

どうしようもなく打ちのめされた危機的な状況で、わたしは 2 度ほど音楽に人生を救われました。そのうちの 1 度が、マーラーの音楽との出会いでした。25 年ほど前、およそ 2 年間、東京でマーラーの交響曲の演奏会があると、オケやソリストにかかわらずほぼすべて聞きにいきました。どの交響曲も好きですが、やっぱり完成度から 5 番でしょうか。マーラーの現代的再評価も、この 5 番から始まりました。25 年前は、「なんて分裂的な音楽か」という声も聞かれましたが、その激しい振幅こそ、マーラーの真髄です。映画『ヴェニスに死す』の冒頭で使われた弦楽器のみの美しいアダージョ楽章から、いきなり管楽器が鳴り、おもちゃ箱をひっくり返したような終楽章への移行こそが！

4. 研究室のモットー

福田研究室のモットーはパリ市のモットーでもある

「たゆたえどしずまず」です。

一見軟弱そうにみえて、硬直したり独善的になったりすることなく、つねに柔軟で、外のものを受け入れ、活発に議論をしながら、多面的にものごとに取り組む精神を示しています。研究室の扉はだれにでも開かれています。ときに激しい議論で大揺れになっても、それを糧[かて]に豊かな思考を築いていこうと思います。

村上 公一 (むらかみ きみかず)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

1956年愛知県に4人兄弟の末っ子として生まれる。名前が「公一」なのでよく長男と間違えられるが、本当は次男。名前の由来を両親に聞き損ねてしまった(両親ともにすでに鬼籍に入っている)。

名古屋大学で大学、大学院生活を送る。大学院博士課程在学中に中国上海の復旦大学に2年間留学。1988年に名古屋大学文学部助手、1990年に福井大学教育学部助教授、1997年から早稲田大学教育学部に。

ICT環境下での多言語間のコミュニケーションや外国語習得のあり方に関心がある。また、言語や文化の越境現象に興味を持っている。

2. 新入生へひとこと

まだできて三年目の学科です。みんなであいっしょに学び格闘していく場を作り上げていきましょう。新しいことを始めるのはわくわくして、楽しいですよ。私は新しいことを始めるのが大好きです。持続力が足りないのが問題なのですが。みなさんは是非、4年間このわくわく感を持ち続けてください。

3. おすすめ

(1) 本

『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし・II アジアへの／からのまなざし』(竹内

好著、丸川哲史・鈴木将久編、日本経済評論社)

私は個人の全集をあまり持っていない。大学に入り、20代前半までに買った個人の全集は『三遊亭円朝全集』(角川書店、全7巻、別巻1)、『漱石全集』(岩波書店、新書版、全36巻)、『竹内好全集』(筑摩書房、全17巻)の3種。これが現在の自分自身の出発点のような気がする。

竹内好は鲁迅の翻訳で有名な中国文学研究者だが、同時に、アジアから逆照射することにより日本の近代の意味を考え抜こうとした戦後の一時期を代表する一人の思想家でもある。最近再び脚光をあびつつあるようで、昨年末に上記2冊が刊行された。第一冊の冒頭に置かれた「屈辱の事件」は1945年8月15日の彼自身の回想である。「八・一五は私にとって、屈辱の事件である。民族の屈辱でもあり、私自身の屈辱でもある。」彼の言う屈辱とは何か。興味のある方は生協にも並んでいるので、手にとってみてください。

(2) 映画

侯孝賢監督『悲情城市』(台湾、1989年)

台湾が1895年に中国(当時は清)から日本に割譲されたのはご存知ですね。日清戦争の結果です。当然のことですが「台湾民主国」独立宣言など抵抗運動が起きました。日本は軍隊を投入してこれらを鎮圧しました。その後50年間、台湾は「日本」だったのです。1945年、敗戦と共に日本軍は去り、かわって大陸から勝者としての国民党軍がやってきます。当初は台湾の人々も国民党軍を熱烈に歓迎したのですが、国民党軍から見れば、長年「日本人

として暮らし、中国語もろくに話せない台湾の人々ははたもな「中国人」ではなく、蔑視と搾取が始まります。ここから両者の衝突が起きます。国民党軍は武力で鎮圧し、そのまま弾圧へと進んでいきます。

『悲情城市』は1945年8月15日の玉音放送から始まります。その後の数年間の激動に翻弄され、悲しみの淵に沈み、それでもなお希望を求めて生きつづける一つの家族を描いています。美しい風景、音楽、そして二人の主人公の男女の沈黙の語らい(主人公の男性は聾啞者です)が印象に残る映画です。

(3) 音楽

黎錦光作詞・作曲、李香蘭唱『夜来香』

戦前の満州に李香蘭という一人のアイドル女優がいました。彼女の演じる抗日の少女は、毎回かならず、日本人男性と出会い、恋に落ち、やがては抗日の心を融かされていくのです。その後、上海に移り住んだ李香蘭は中国人監督の映画に出るようになり、一躍大スターになります。その彼女が歌った『夜来香』。1945年初夏、上海で開かれたリサイタル『夜来香幻想曲(ラブソディー)』は熱狂的なものでした。その2ヵ月後に8月15日がやって来ます。李香蘭、実は日本人だったんですね。日本に帰国した彼女は山口淑子として今度は日本語で『夜来香』を歌います。「あわれ春風に 嘆くうぐいすよ、、、」。しばらく前に上戸彩主演の2夜連続テレビドラマ『李香蘭』やってましたね。

4. 研究室のモットー

モットーは私一人で作るものではなく、研究室に集う学生諸君が作り上げていくものだと思います。新しい組織ができれば新しいモットーが生まれる。みなさんとの間でどのようなモットーが形づくられていくか、楽しみにしています。



渡辺 芳敬 (わたなべよしたか)

1. 略歴 (学歴もふくむ)

宮城県出身です。早大一文卒。充実したキャンパスライフでしたが、教室が一番遠かった。要するに勉強しなかったということです。1984年から3年半パリ第一大学(哲学科)に留学。メルロ＝ポンティを中心にフランス現代思想を勉強しましたが、最初の1年は映画三昧。皮肉にも、アメリカ映画と日本映画をみまくりました。まだビデオ全盛の時代ではなかったので、古い映画を日本で見るのができなかったからです。帰国して、浴びるように見まくることになりましたが。ここ数年は、映画以上に、舞台上を走っています。三重大学、横浜市立大学を経て、2005年に早稲田大学に赴任しました。教育学部生は、国公立の学生気質にかぎりなく近いというのが偽らざる印象です。

2. 新入生へひとこと

痴呆にならないよう都会にでてきましたが、地方出身者の悲哀はいつも消えません。早稲田は規模が大きいぶん、いながらにして異文化交流が体験できる稀有な場所ですが、いまそれを誰よりも実感しているのは、教師の僕かもしれません。というのも、えてして、学生時代は人間関係が深まるようでそうでもないからです。つきあいたい人とのみつきあうというパターンが多く、授業もいやなら出なければいいわけですから。人が多いぶん、孤独になるのも早稲田。教室を近くするのも遠くするのも、そうあなた次第です。

ということで、「書を捨てて町に出よう」ではなく、「書を手に大学に行こう」そして「教室を劇場にしよう」。ライブこそ人生の醍醐味です。

3. おすすめ

(1) 本

硬派?のあなたには、

上村くに子『恋愛達人の世界史』

(たかが恋愛、されど恋愛)

軟派?のあなたには、

カミュ『異邦人』

(はじめてフランス語で読んだ小説)

(2) 映画

硬派?のあなたには、

ヒッチコックの「裏窓」

(映画の映画の魅力)

軟派?のあなたには、

小津安二郎の「東京物語」

(生きて死ぬということ)

(3) 音楽

硬派?のあなたには、

桂枝雀の「落語大全」

(話芸＝顔芸の魅力)

軟派?のあなたには、

グールド演奏のバッハ

「ゴールドベルク変奏曲」

(学部に入學当初、こればっかり聞いていましたっけ)

4. 研究室のモットー

傾く者たれ! 歌舞伎のルーツは、傾く＝カブクにあります。みなさん、ご存知ですか? 他者はもとより、つねに自分自身と距離を保ちつつ、自己中から遠く離れて生きること。極限を志向しつつ、熱し過ぎることもさめ過ぎることもなく、粹に生きることです。



(渡辺ゼミの学生の作品「達磨」)

向後 恵里子 (こうご えりこ)

助手

1. 略歴 (学歴もふくむ)

千葉県北東部、利根川の流れる人口1万5千人のごくごく小さな町に育ちました。小学生の頃は毎日ランドセルを放り投げ、日の暮れるまで遊んで過ごしました。繁華街も予備校もなく、電車は一時間に一本のみ、なので、都会に憧れを抱きつつも、しごくのんびりと育ちました。

それでも高校の時分には友人と『びあ』を握りしめながら東京の美術館を訪れました。当時、ゴッホの《星月夜》とプランクシーの《無限柱》に感動し、モノを見る喜びに触れたことが、のちに美術史を専攻するきっかけの一つになっているようです。

早稲田大学第一文学部へ進学、上京。当時は漠然と文化と歴史に興味を持っていましたが、創作に関心もあり、文芸、演劇、歴史など、何を学びたいか揺れ動いていました。結局、多様な関心を生かしたいと考え、「学際的」と言われていた美術史を選びます。

とはいえ、学生生活はあまりパツとしませんでした。都会のペースになかなか慣れず、特別何かにぬきんじているわけでもなく、語学も不得手で、とても出来の悪い学生でした。それでもいつの頃から

らか、まだ学びたりない、自分の力で考えられるようになりたい、と感じて大学院へ進学します。

学び続けてゆくなかで、だんだんとモノやイメージや人々の営みを、もっと多様な文脈——美術に限らず、ひろく文化や社会——が交差する場に開いて、そのダイナミズムを受け止めてみたい、そうした歴史を自分なりに描いてみたい…と考えるようになり、右往左往しながらも今日にいたります。

2. 新入生へひとこと

縁あって昨年より助手として勤めさせていただいています。まだまだ修行中で半人前ですが、皆さんの学びの場の、縁の下の力持ちになればと思っています。どうぞ気軽に声をかけてください。

学生生活では、想像力をのばすことを大切にしてほしいと思います。想像力は、ナイーブな、独りよがりの狭い視野からは育てられません。好奇心をもって多くの人やモノと出会い、広く深い視野を育ててください。

3. おすすめ

(1) 本

『アウステルリッツ』W・G・ゼーバルト著

鈴木仁子訳 白水社 2003年

ほとんど段落替えのないまま続いてゆく文章と、その間に配された多くの写真が特徴的な小説です。「アウステルリッツ」

は、登場人物の名前であるとともに、人や土地の記憶と結びつき、有機的なイメージを喚起してゆきます。

読後は、アウステルリッツとともに、近現代ヨーロッパの、記憶と歴史をめぐる長い旅路を歩いたかのような気分をおぼえました。イメージと記憶、歴史に関心のある方におすすめしたい一冊です。

(2) 映画

『ムッソリーニとお茶を』1998年

フランコ・ゼフィレッリ監督

舞台は1930年代～40年代半ば、ファシスト政権が力を伸ばしつつあるイタリアトスカーナ地方。フィレンツェの外国人居住区に住むイギリス人女性たちと孤独な少年の物語です。

政治情勢に翻弄されながらも、イギリスとイタリアの文化を愛し、自らの信ずるところをゆずらない姿勢が、時に静かに、時にユーモラスに、時に熱をこめて描写されています。彼女たちはただ頑固なだけでなく、弱い立場の人や物言わぬ作品を当然のように守ろうとし、また自らの過ちを正すことにも躊躇しません。

4. 研究のモットー

書家であり歌人であり美術史家であった会津八一は、四項目からなる「学規」をのこしています。いわく、「ふかくこの生を愛すべし／かへりみて己を知るべし／学芸を以て性を養ふべし／日々新面目あるべし」。とてもこの境地には至りませんが、折に触れて思い出します。できれば、「この生」だけではなく、「あの生」——自分以外の誰か、歴史上の有名無名の人々を、「ふかく愛す」ることができるということを考えています。



ギリシア、
オシオス・ルカス修道院にて

茂木 良治 (もぎりょうじ) 助手

1. 略歴 (学歴もふくむ)

東京生まれ東京育ち。小学校から高校まで九段にある私立へ通う。サッカーが好きで、昼休みは校庭でサッカーばかりをしていた。このころから、フランス人サッカー選手ミシェル・プラティニが好きという安易な理由でフランス語の勉強を始める。高校時代は勉強が嫌いであえなく受験失敗。1年の浪人生活の後、上智大学外国語学部フランス語学科に入学、大学3年の時、何年もフランス語を勉強してもなかなか身につかないという悩みから応用言語学(外国語教育学)に興味を持ち始める。同大学外国語学研究科言語学専攻へと進み、当時大学に普及し始めたコンピュータを利用して、外国語教育に活用できないかと考え、本格的に研究を始める。大学院在学時に研究の幅を広げたいと考え、フランス北部リールへと留学。初めて親元を離れたため、生活に慣れるのに苦労しつつも、約4年間滞在。その後、縁あって2008年4月より早稲田大学で助手として着任。

2. 学生へひとこと

大学を卒業して約10年になりますが、今でもあの頃もう少し真面目に勉強していればな～なんて後悔することがあります。今思えば、楽な方へ逃げてばかりでした。大学生は自由に使える時間がたくさんあるため、やるべきことを後回しにしてしまいがちです。いろいろなことに挑戦して有意義な大学生活を過ごしてください。



リールオペラ座前にて

3. おすすめ映画

最近見た映画2つとフランス留学中に見て面白かった映画を紹介します。

(2) 『ベルセポリス』

(マルジャン・サトラビ監督)

原作はイラン出身パリ在住の著者の自伝的なBD(フランスの漫画)。フランスでは大ヒット、日本語にも翻訳されています。

イラン革命後の男女交際の禁止やスカーフ着用義務など厳しい法律が制定されたイスラム社会と留学先ウィーンで体験した西欧文化の対比を主人公の少女マルジの視点から描いている作品です。イスラム文化出身の人から見ると西欧文化はこう見えるのかとかいろいろ発見があります。

(2) 『潜水服は蝶の夢を見る』

(ジュリアン・シュナーベル監督)

雑誌ELLEの編集長が突然病気で倒れ、全身麻痺になり、左目の瞬きしかできなくなるが、瞬きだけで自伝を書き上げるという話。テーマを聞くと、シリアスな映画かと思ってしまうが、全身麻痺のせいで言葉を発することができない中年男性患者の本音(?)が聞けて、実際は笑いに富んだかなり面白い映画です。

(2) 『スパニッシュアパートメント』

(セドリック・クラビッシュ監督)

フランス人大学生が欧州交換留学制度エラスムスでバルセロナに留学し、そこで他の国の留学生たちとコロカシオン(共同賃貸)するというお話。

主人公はフランス人なので、言語は基本的にはフランス語ですが、スペイン語、ドイツ語、英語が飛び交うまさに複言語的な映画です。文化や言語の違いなどの面からも面白い映画です。留学に興味のある方にはおすすめです。

4. モットー

基本的に学生の皆さんが有意義な学生生活をできるよう裏方で働いています。その他に、外国語科目のCourse N@vi関連の仕事をしています。皆さんがCourse N@viで効果的に外国語を学習できるよう工夫を日々考えています。もし何か要望があれば、遠慮なくおっしゃってください。

学際コース大賞

2008年度の「学際コース大賞」は、選考の結果、以下のとおりになりました。選考委員による講評とともに掲載いたします。受賞されたみなさん、おめでとうございます。

銀賞から銅賞に該当する論文を「学際コース大賞受賞論文集」として公開しています。

【金賞】

該当者なし

【銀賞】

渡部晃希（指導教員：神尾達之）

「日本のオトコ表象 ―モノから読み解く現代―」
（選考理由）

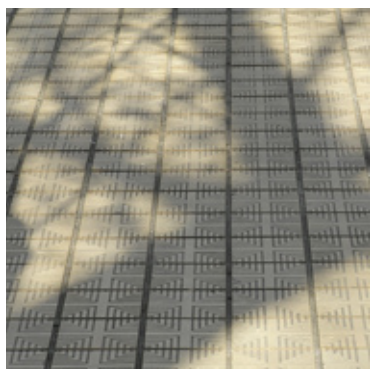
本論文の著者は、「硬派」的な「父性」（つまり父親として属性）が世間で失墜しつつあることを実感していましたが、この実感と「オトコ化商品」の流行とが、著者の脳内で化学反応を起こし、小さな表象の分析が大きな社会意識の変化についての考察へと展開していききました。私的な不安が論文執筆の動機となっていたことで、論文全体にエネルギーが満ち満ちていますが、その一方で、著者はみずからのエネルギーを冷却させるために、各種の副次文献を渉猟し、自己対象化も冷静に行っています。このバランスによって、本論文は「オトコ化商品」の分析に終わらずに、男性にフォーカスした世代論となり、文化現象の分析として、すぐれた内容となっています。

【銅賞】

松村みどり（指導教員：伊藤守）

「少女たちの恋愛のかたち
― ケータイ小説にみる現代少女たちの恋愛観分析」
（選考理由）

本論文は、ケータイ小説に描かれたセクシュアリティや他者関係を分析したものです。これまでの先行研究を十分にふまえながら、その単なる応用というのではなく、独自の分析を施している点が大いに評価されます。とりわけ、①「ポストかわいい」と論者が特徴づけるセクシュアリティの変容が生まれていること、② 援助者でもあり敵対者である女性同士が構成する「少女社会」が物語の枠組をなしていることを明らかにした点に、著者の鋭い分析力がみられます。言語学者グレマスの行為者分析の応用などのほか、中学生を対象とした聞き取り調査などもされており、多面的な分析という点でもすぐれた論文です。



【奨励賞】

原正敏（指導教員：後藤雄介）

「小っちゃい国の日本語志向

ー シンガポールの大学生の日本語学習の
動機づけと対日イメージの変化

～ 学習者へのアンケートから探る」

（選考理由）

本論文は自身の異文化体験にもとづきながら、シンガポールにおける日本語学習者の動機について、社会的視点から多面的に分析したものです。先行研究を批判的に検討しつつ、さらに現地において独自のアンケートやインタビューなどを精力的に行い、詳細かつ丹念に分析した点が大いに評価されます。

渡辺哲也（指導教員：桑野隆）

「カジノ合法化が与えるギャンブル依存への影響」

（選考理由）

本論文は「カジノ合法化」というきわめてアクチュアルな問題に取り組んだ点が、多様な文化現象を多面的に分析する学際コースの論文として、まず積極的に評価されます。複数のデータを収集し、日本の事例を諸外国の先行事例と対比しつつ、カジノ合法化によってギャンブル依存症が増加するのかどうかという非常にわかりやすい視点から、カジノ合法化の是非を結論づけた明快さが非常に印象的です。

太田芳（指導教員：村田久美子）

「J ポップから探る日本人の〈男性性〉と〈女性性〉
の変化ー男女平等社会に向けてー」

（選考理由）

本論文は、男女機会均等法施行以来 20 年を経過した現在、人々の男女平等への意識がどのように変化したかを詳細に検討したものです。本論文の独自性は、その男女意識の変化を、過去 23 年の J ポップの年間ヒット曲ベスト 3 の歌詞で使用された人称代名詞の分析を通して検証した点にあります。多様なデータ分析のほか、ジェンダー等に関する既存の研究にも丁寧に目を通しており、説得力のある内容となっています。

淵岡浩太（指導教員：神尾達之）

「〈ネタ化〉する社会

～現実と向き合えない〈私たち〉～」

（選考理由）

本論文は、「ネタ化」という独自の概念によって、自分たちの世代が現実に向き合えない心的な姿勢を問題にしています。ポスター、ネット上のコンテンツ、広告、政治現象、映画、雑誌などの多様な素材を用いて、ネタ化現象を多面的に分析し説得的です。

濱村小枝子（指導教員：福田育弘）

「贈り物の驚くべき複雑さ」

（選考理由）

本論文は、とくに日本において重要な慣習的な行動となっている「贈答」という行為を贈り物の内容の変遷だけでなく、送り手や受け手の意識の変化もふくめた文化的な行為として分析した論文です。民俗学的なアプローチをふまえつつ、難解なブルデューの「象徴財の経済学」を自分なりに消化して贈答行為に応用し、これまでの贈答文化論にはない視点を導入して、贈答行為に隠された重層的な意味が明らかにされています。



戦艦ポチョムキン 1925年 ロシア
セルゲイ・エイゼンシュテイン監督

「革命の輸出」が500円！

随分と昔の無声映画ですが、昨年から500円DVDの仲間入りをしています。

私が初めて観たのは1960年代後半で、場所はキャンパス内の講義室でした。正確には覚えていませんが、どこかのサークルによる上映だったような気がします。当時大学一年生の私は、内容のほうはいまひとつ理解できなかったにもかかわらず、この映画にすっかり圧倒されてしまい、「映画」観ががらりと変わりました。かくも衝撃的であった理由が、エイゼンシュテイン独特の「衝突のモンタージュ」や「ティパーージュ」をはじめとする種々の創作技法にあることを知ったのは、その後何年か経ってのことでした。

た当時は、もう一度観たいと思っても、この映画が一般の映画館で上映されることはまずありませんでしたし、映画がビデオで観られる時代が訪れるなど思いも寄りませんでした。

そのような貴重な映画がいまやDVDで、しかも500円で買えるとは、まさに隔世の感があります。いや、このような言い方をする資格があるのは、私よりもっと上の世代かもしれません。じつは、この『戦艦ポチョムキン』という映画は、ロシアで公開された翌年の1926年に横浜港までたどりついていたにもかかわらず、ときの日本政府によって上陸を拒否されてしまいました。日本で観られるようになったのは、その後30年以上も経た1959年のことなのです。

この映画は、1905年に戦艦ポチョムキン号の船上で勃発した水兵たちの反乱や、それに呼応した民衆を描いたものですが、当時の日本政府は、税関で試写してみて、これは「やばい」と判断したわけですから。「革命の輸出」とみたのでしょう。日本でも人々が感化されて「反乱」しまいか、と恐れたのかもしれませんが。その程度の政府だったということなのでしょうが、考えようによっては、それほど怖がられていたという一事をもってしても、この映画は必見の価値あります。



しかし実を言うと、この『戦艦ポチョムキン』はたんなる「革命の映画」ではありません。この映画が図抜けてすぐれているのは、「革命の映画」とあると同時に、いやそれよりもむしろ、「映画の革命」になっていることです。私も当初はよくわからずにいたのですが、この映画がもつ圧倒的な力の秘密は、じつに緻密に研究され練り上げられたエイゼンシュテインの創作技法にあります。たしかに、描かれている内容も「革命的」ではあるのですが、それ以上に「革命的」なのは形式、すなわち独特のモンタージュやメタファー、メトニミー等々の映画制作の詩学なのです。その意味では、この映画を観るにあたり、邪道かもしれませんが、「内容」をひとまず括弧に入れておいて「形式」のみを追ってみるのも悪くはありません。

ちなみに、エイゼンシュテインの博学ぶりは有名で、心理学、民族学、言語学、文学、美学その他のさまざまな知識を身につけるとともに、世界各地の文化からも学びながら、数多くの文章をしたためており、日本語でも何冊も翻訳が出ています。また、日本語にもある程度通じており、映画のモンタージュを漢字や俳諧、歌舞伎、浮世絵などになぞらえながら説明したりもしています。今日では、エイゼンシュテインは映画監督としてだけでなく映画記号論の先駆者としても評価されていますが、そうした論考を読んだあとで『戦艦ポチョムキン』を観なおしてみると、さらにまた新たな発見があるかもしれません。

(T. K.)